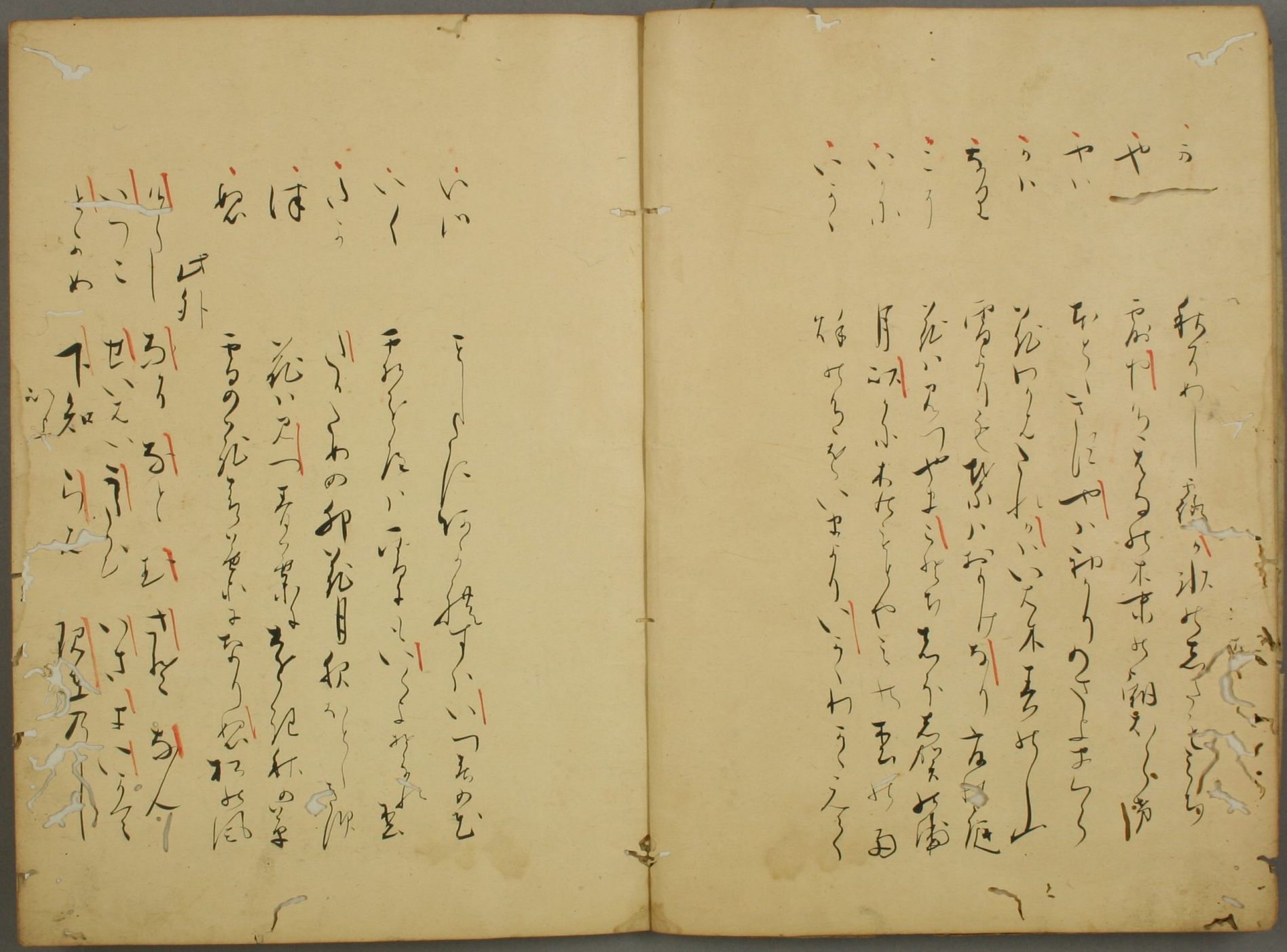
連歌秘事抄

中村俊定文庫
文庫 18
30

宮城県図書館蔵
中村俊定文庫

○連歌百韻抜書大事

[illegible]



○下知る事

世く　ろわ女く紅のこ乃か秋暮なあめ

つくせ　すかへしせるおぶむしこの作ちらふ

まて　おもしろくくふ袖やて与す擁

かけ　かけ尾花あき春乃夜あさら

こゑせ　こゑせくしさなくく上まおも音

花ふる　さう臥まし　おとふ那花しは野花や

わ　むかう香しは　すうん多み一吹　那花

ちし世具す、かすわ月

右切字近代作例用る陽和（自然）、飛句ら用

上出来る時よ旧例さ

○切字さし一名字三世の一名字の用

ろ書み一名字あろい不切

現在の一　一事ふ交る心ふ一おくさし

未来の一　事ををとこすかないきに一事に、

以上

○室ある殺白らし産

杉ゑろ一わ一やこうなむん

水さらし　山下雪…ん

一　月かも上うつる露かゝる哉し

為ちらき月やうし　なおつかん

一　志ろ引やの分脚と云是也それは脚

切字二ツあり現在てトやかな字らし

とまり詠上三ツわり又引や字入しれも

やとも切りとはてり同玄妙の発句をさまよ

ならく志ろ引やのてまえにトひし

こゝのつより山の端現在電也

此発句も玄妙と

おわりとねふきそへゆへるやかやしかなふし

こゝ迄玄妙の発句あけよりにへ五切字切

らうしいきえわへ例の字要すまねの

肉子ふ用ト朱気しし在ト

○大廻しの文

あうさしと大る日ゆこく玉に鳴

雲よしふけゆくちゆく私月

此切字心まし切発句かくしト上下ぬ分別

あふさしとわきは下に玉は鳴とあり

下此部今宵は大廻しとしみ雲ちふるふと

云ふ下より月と宵同前なり

一 三段切なる

花ハいてふ 柳ハ緑とはきし哉　三段切也

さみだれは 岸のまゝにぞ 笠の水

此句 柳と時は風としてあり 二句

いまよりは 雪の字より 三段切字は

上やみ 岩をと出る字を字に上

三つありさてこれ 三段切といふ上下にいふ

○三字切なる事

さみだれや 有りやとん字延

雲ひとつ よりうちの下 つきぬ雲みゆる

有りあけるもやと心ね字と三句

字もいやへやみかりかしよつきれ

此二字は字ふかり大りお

○二字切なる

折人いりにはしゝ人風なし

なまぐさし こうたる袖にね こいふれ

有明やうらみもねしとけ逆

二字切なれちは大やとうらめし迄と云

同前

○大廻子不成句なる

松ふくりハ都乃やよみ落のかく

芳いちらいひて下ケ句とよみ候

首尾なれハ松ふくりちらさくひれくとく

かなし不留発句して

みなしうり木の芽をつさこみ　春分

芳いうつゝこ忘れかゝしとくとすへし

てまへはちらしかく霜をす

かけにむ花もうら御池かれ

月もしのも名もつゝみさを雪かせ

秋のとき卯の花けら京やうく

けふの月やとひくらかさともうろ文

ゆあしの乃やとふ　やかるゆかのさしく宮ト

けやの字にかりし発句五歳ノト月山

あし秋やとさけ二句に新やえ

よりいしつかる詞めもしト氏

切字のみあさ字あ迷にみして　てしまれ

かくし留りかのありもさく字とふくハ

この乃そ・す　発句

もりよの三字みくて　とゆる身く

一 ての字にあるしるしに　道ゆきてゆくへ
雪のみなには　みちをとへとや雲に入
十日の月かな　いふならばしも　よし
かくれもてみえにけり　けふもいまだなく
ト　てには　てにはを　離ル　毎ト　ヤ

○九　やにとつ　文
暁や　あらしのかけの中にさわく
霜ふけて　来る風の　嵐かな
かり鳴て　あれはまた　月の入り柳
是はいふ字　そのみな字より　それ　ぬめの　や　乃
字や　けや　からいて　と　なる也

○八乃やのつゞ　○のやとは　東路や
江をわたるや　春日野や　大和の浦門
けれはあらく　けや　あらさるに　あらはしでとむ
ことに　川辺や　山松や　山陰や　江の鳴や
流れや　いかに山や　けれはのやさしてとて
あとに　なる事や
○花なるさかや　月おもしろい　今日さわ　すの
火る　けんの　けや　切字小用也
○七乃やの事　口合たるや
又やとえ人　あき世の一紀かえいえ久
切や　ちるはやの　とゝしまつさきて　まさるらん

中ノや　鳥ノつる　新ふ日乃ハ
ゆゝ　かくそし　所のわゝ　きし　おもし
八の　久と　いゝ　ゆ　ゆ　月は　雪
疑や　おゝく　ゝ　かつ　ゆ　ゆ　ゆ
すゝの　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
以上　七月　ゝ
五月雨より三川わいの　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
やし八わい中の　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
八のやゝみ五わゝ疑　ゆ　ゆ　ゆ
よしあゝ　ゆ　ゆ　ゆ

さい　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
久ゝ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

かぜはいとすさまじく初人はさらにも
おもひ寄ぬ方にとかくさわぎ騒
をりふしはるかなる月いとあはに
見えしかどもこの月のこころの
ふかきにつけて
を　風さへ荒き秋の松にて
八　又もあはれ思ひ出はまた
だ　うへもなくしのぶの草の露
も　いはしろ山ふかく侍ふ
かゝる伝言さへ多いおもひ
詠上

神さへ荒おる野分にて
点ほうそく人かけやり　玉藻
ちあれば
たゞかりよるうら
たゞそれとはひてとゝおもふ
ゆゝしむるなり　こゝろあるまゝ
仏る自心十九てまはらふく　五口侍
いつのてらふる事
いつ色のふかさまりて
たはいはこゝのわとなし
まうらあはいの乃　都　はるゝ

[illegible]

○春日の野辺の若草

梅の花[illegible]

[illegible]

太の白ちるは[illegible]

[illegible]かやの春日の野辺の若草

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○三世の一日なれば大[illegible]

みえ　きく　[illegible]

太のそこに[illegible]

[illegible]不[illegible]

○松立の一[illegible]

山[illegible]

[illegible]

○赤ふねトもいふ　かわへト云は[illegible]

たきるへト　かこはせト

なかへト

大切字なりやも也　川を拂へて

○下の句てにをはる大雁

てとゞめる事

蝶のとまる百合の花のころかて

まりこえ行　月にかゝりて

おりみせ有　月にさゝへて

江上帆　新かり鶴かしみなり

剃　乞食句三もとゞめる事の

は人かまうち為鶴云　[illegible]

但せんノ字か上なり
十字月ニスエなり

○薪のおそは　ものすてい　のこりみ薪しけ

かふるめし考とめ不定の句に不確と　沢三にはし　院印

○くれは雪あそしくの

在五中将　ありてん人おもそて　出てい生まれ人

山をね守てまとはちとしても也とも終い

ねきもへとこそのいもうき初せて太ね

人へたのうしにけトくいひさくもたね人

ほかふねすてふ又まくひとりあり

○ぬのなる事

天地さえをいなるもともつかりける

かやくまれていめに置すみへうし限ト

おらへつくもいえんやまたれたふるそ

[illegible]

○ふのゆとしたゞ道ちかしたゞ
[illegible]
右同前

○をとたゝとゝ云ひ[illegible]
月うゝ
[illegible]

○からゝ[illegible]
[illegible]
○ゆの分別[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
○一字[illegible]
[illegible]
○さ——の[illegible]

きえ[illegible]

さかりとはいふなり　おもしろくみ侍ける
おもふもおもし
四月ころも不月又雲りゆへ
かはしき雨の日やうに
いかにいわれすかたちさるみ
蚊帳やといひてらんとかく句よみ
まさにかなはらく新月かり申し
脇立のしみ字みえぬいふへし
○かさみてらんのます
難きもちらしんおもしろし
えらるゝ人と発句しぬ難ありん

不知として月並の恩なり
○二字ゑかとふり　前句の人なをしく
ゑわらるゝも有りく
○三字くいへとふい　三日月るとみ原
とけ老ゆる字　引めあはなりてゝき
当世とくゝなり
老いまみもむけすかいさ
引竹森とひゝるゝ之りや家々集
○四字不同とも去いに発句は
松と梅とわるゝ風と波とみつれし
そことちかきに翁や
○すゝみてる名もみゆす
こゝろ打笑の山風　○神とこそとく

松にまとはるゝ
○岩ほ神とかゝるあり
月なりやまりて日いと
おろ事なり
○あるわゝ
是いかゝ上句たい
仕てしすこのてるなる
和さ
○をうるよりなりそい結ゝ
○はゝ百上乃句は
二句のををき
下の句よい二句なくんとも
の仕ゝ
○仙家
○
三のかみていてゝ
日いゝ
○こゝ一句の中
是韵
○

う
く
す
い
ぬ
ふ
む
ゆ
う

あきはぎのうきふしごとに
河のまろやの時雨
ちるもみぢ一陣の風
あるきまとかなかりしゆ
やはらぎまさりてらぬみ
みちの屋外の雲
みちさいつるをつゑ
うへ高ふ月こそ新

かや〳〵のともえし円ころや一
○かもとより○このいとまろも　みそよす、
　ます大和ころ○の雲いたるかい
付句かしかくいろしこく定りよる
つすいこのいよく卜定なし風車いかし
よく〳〵
。御むし屋る星此雲いたるふと
付句らいゆるいろし鳥い初かい乃ろし
もく了有他分別
○むつふし
　すとよかも井の源もひとかなか
小松京さへ志かるい竹からやし判

付さくいかまかなふや
○かさ孫又、地又よふる
、重又　又なまてみなかりとあ康の彖
、地又　みえる数とおよへいあくい残て
○成よりは精の文ある網えへ多し
　はらしとりまとなりたく吉野山
○八字付示
　さへ咲ふ　杉　こそ　は　誰　と
○皮肉骨こと連歌
　人とわきとれ秋の月河り
土佐く
　萩原やかれなる事こ風の夕哉

関付

胃付

真草行

草

真草行一坐乃内ニ

世の中

分

秋風ニ

山の月

[illegible]

○[illegible]連歌

[illegible]

○[illegible]連歌

[illegible]

○切句連歌

[illegible]

○[illegible]

[illegible]

○かけてみる

[illegible]

○[illegible]

さんうしめくゝ袖みせのすさ
猶ゐさいすの山乃花ゆり
○かさねてまん
木おきりけふまみゆもゝふる
春いさくらしを不おほきて
○あふりてまん
みゆきさへゆるちゝみ風ゐる
松原乃あはれしもさはのゆふり
右あみ句
いつしかふ雲さほとりん花の香
いかなくれあかつて花うる紅し
言紙の花乃おもひんこゝしやさしさて
うらし
宗

中川人まくらゆやかすゝ宿の露
言家のうわおくられゑ和すてつし
物よじのみまきみゝさまかる
せうらみ人くゝり

天文廿四年三月三日

長慶ゝ所

宗牧判
宗養判

三好修理大夫長慶

け書

〇遠ちかなを千詞ニ成文

おもふは人にとへとや 花咲く

とはいト ハ切字 おいつく字し

老いしうきみえてさし めく

す哉字 切字も いはすくつくし

桜の山風雪のかそたゝさえんしく

がハ切字とんつく字や

影みつるも人を見ぬれ さむしく よ

やハ切字 乃いはすさ字なり

〇秀句ふくつく字

所をえるもいかなくて葉乃露哉

いつまでもあてい切竹いはさし云

まふ切人

人いいまもとさ屋に秋ふうく

よるまししとふい切竹りとまさとふく

手切ト也

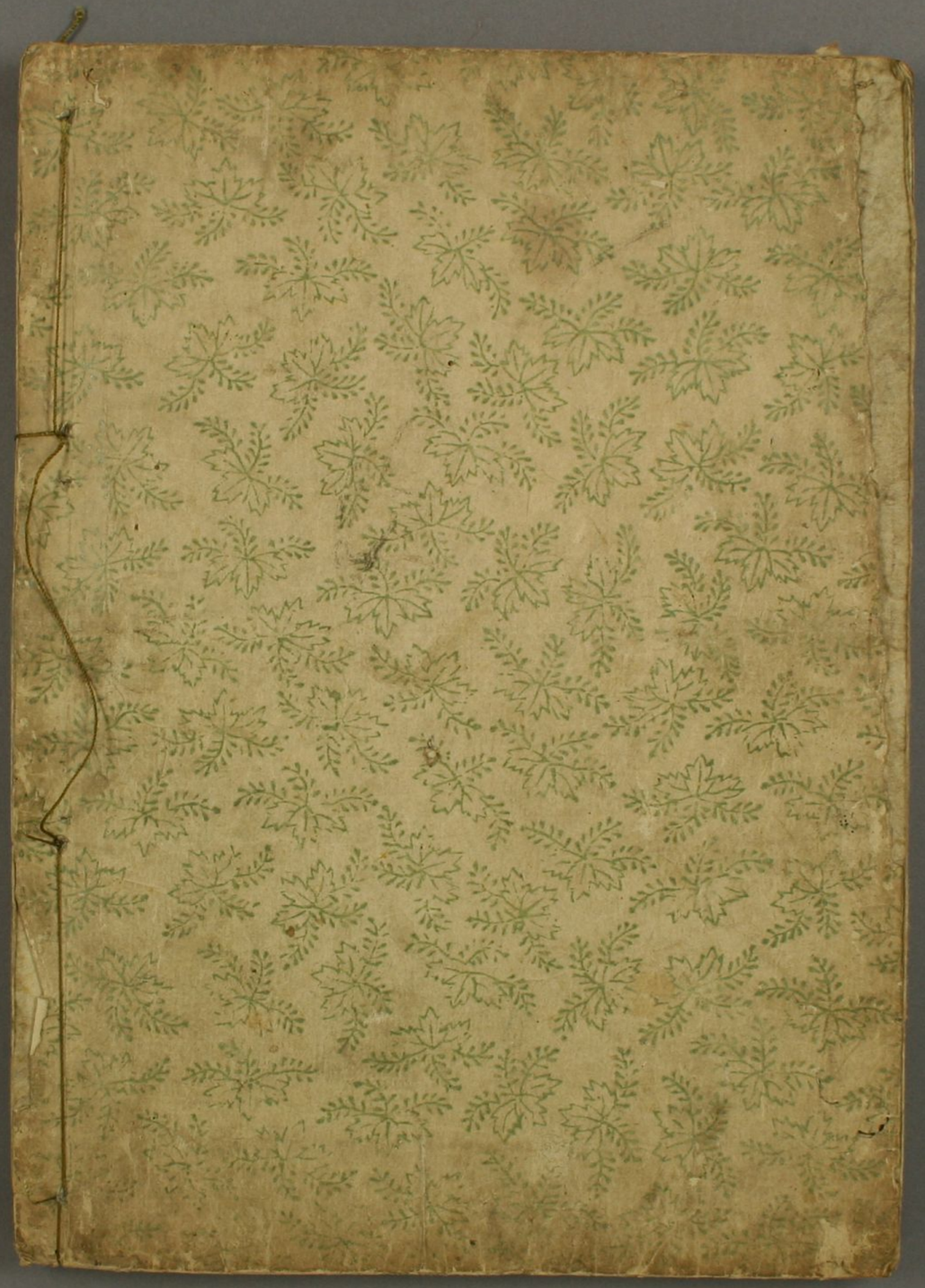
〇假定乃つくる

南まゝの木のかふしらうきゝ月哉　忠雅

七文字也

[illegible]

黒牛

都合二十一牧

羊時庵